

此処は一年草のコロニー

此処は一年草のコロニー

平野春雄

ここは都市の中心にある庭園

植物の租界である

無限大に広がる頭上の蒼穹すら自在に区切る恣意

一点の雲もない碧空

周囲の騒音公害から防衛する城壁

眞昼のこの静寂は一体何なんだろう

緑の森に囲まれてひそかに温存されているが



それは眞昼の陰謀と謂つて良い

豊饒と妖艶に暮れた紫陽花はすでに無く

艶やかな牡丹の青春もあつけなく老醜を迎えているのは

自然の摂理であるのか

百花繚乱の薔薇はにぎにぎしく入れかわり

四季咲きと謂う特技にも支えられて一族の気品と豪華

を誇示する

金魚の群の如きサルビアの眞紅の花弁は半永久に

落花を忘れた如く律儀と誠実を示している

雪国の使者と謳われた鈴蘭が今は枯れた残骸を

とどめているのは痛々しい

時はすでに午後の気配



足下の枯葉を拾って見よう

炎紅色の自然のマスコットに見えても

実は点々と黒点の汚染 或は強欲な昆虫の

浸蝕がじわじわ広がって痛ましい

天上の雲間を洩れて日輪は漸く秋色の気配

それは都会の中の租界のような庭園を舞台とする

植物の青春と凋落のドラマである

都市の庭園は吸収する 塵埃と騒音 虚栄と虚無

都市の庭園は浄化する 汚泥と腐敗

都市の庭園は探し求める 虚心と眞実

そして心の自由を



詩人の死

藤倉一郎

彼は自宅の寢室ですでに死んでいた
妻は別室に寝ていて
朝起きて声をかけたときには
冷たくなっていたのでびっくりした

枕元にはリルケ詩集がおいてあった
かれは詩人だったのだ
部屋にはサマーセット・モーム全集があり
いろいろな画集があった

となりの居間には
鷗外、漱石、直哉の全集があり



光太郎、達治、順三郎の詩集がならんでいた
なにも話はしなかったけれど詩人だったのだ
いつも病気で不安なことを
くどくどとしゃべっているだけだった

本ばかり読んでいて妻とは会話もなかった
本がいつぱいで邪魔だというところ

かれは不機嫌だった

同じ家に住みながら妻と語ることもなく

孤独に詩を読んでいた

さびしい詩人だった

別れの言葉もなく沈黙のまま死んでいった
詩を残すこともなく

沢山の書籍を残して死んでいった

死はこうして誰にでもやってくる

死は孤独なのだ

たった一人で死んでいくのだ



妻は放心して
死んだ夫をみつめている
九月の朝五時である

死はあたかも

死はあたかも
風のようにやってきて
やさしく手をひいて
わたしをいざなってくれた

旅立ちには
美しく
素敵で
てぶらででかける
小旅行のようだ

風景は美しく
なつかしい音楽もきこえる



見覚えのある人々が
あかるく行き交っている

ここが

わたしの求めていた

故郷だったのだ

わたしの永遠の

いこいの場所だったのだ

こうしてわたしは

雑事をのがれて

のんびりと過ごすことが
できるのだ

犬を連れた奥さんにも

出会うかも知れない

海を見つめて

ひとり

コーヒーをのんでいよう



寒川の空

助川 信彦

丹沢の山なみ蒼き彼方には残雪の富士端然と坐す

放し飼ひの軍鶏一羽道にゐて通園園児の跡従き歩む

黒土の畑よりむくり白き肩出だして並ぶ大根の列

川下より翔び来し白鷺水面に下らむとして羽ばたき昇る

介護ホーム前庭に咲く河津桜川風受けて花びら散らす

サリサリ芦の葉裏に止まりゐて消ゆるがに鳴くウスイロササキリ

草むらにわが踏み込めばひらと舞ひウスイロササキリ姿を隠す

芦の葉が夕風受けてなびく時サリリサリりと虫鳴き出づる



芦の葉の葉裏に触覚揺らしつつウスイロササキリ吾を見てゐる

草の葉の精にかあらむ豊芦原瑞穂の国を守り来し虫

わが長女の嫁ぎし家の前庭に遺跡ありとて土掘り上ぐる

農事好む長女は前庭耕して根菜類を育てゐたりき

動力を駆使し黒土二米ほど掘り下げられて遺跡現はる

黒土の下に二條の溝の跡南に面し横に連なる

砕かれし瓦を寄せて固めたる跡あり柱の基礎なりと言ふ

基礎の箇所より出でし陶器は淡青に彩色されゐて藥壺とぞ

国分寺より古き時代の寺院跡に再建されし遺跡かこれは

近き丘に郡衙跡ぐんがあり並び建ちて七堂伽藍いかの堯輝りけむ

黒土を背の高さほど掘り下げし下の囲みは竈跡らし

七堂建立当時の人夫ここに憩ひ煮炊きをしたる跡なりと言ふ



先生たち

豊
泉
清

政治家の命短し 長寿国

先生も 出世界進 金次第

雨降って 昔固まり 今崩れ

近頃は 肩身の狭い デブの医者

体重計 恐々乗って さつと降り

汚染米 拒否したくなる 給食費

会議後の 酒宴で口角 泡飛ばし

ばんこつと 無縁老骨の 存在感

秋深し 積んどく本を 少し読み

病む国に 主治医の総理も 匙を投げ

